

頭屋祭祀研究(1)

田 口 良 司*

A Study of the Toya Cult

Ryoji Taguchi

要 旨 本稿は、日本各地にみられる頭屋祭祀の問題を供儀論という視点から再考するために問題を整理しようとするものである。その対象として多くの論議がある宮座のある側面を取り上げ、そこにみられる頭屋の性質と機能を明らかにしてみようとした。この観点から本稿では宮座成立に関する歴史学の論議や、経済史、農村社会学、親族論等に関する論議はできるだけ避け、必要と思われた宮座の成立史だけを取り上げている。また宮田登が指摘するように頭屋祭祀は、日本の天皇制を考察する上で大きな示唆を含んでいると思われる。この点から頭屋の輪番制について考察した。そして頭屋の輪番制とお旅所としての頭屋の家という観点から、移動する司祭と移動する神の問題を日本社会の特質を探る契機として位置づけられるか否かを考察しようとした。そのために宮座の事例を検討することでいくつかの問題を提示しようとした。対象とした宮座の事例は三重県内のものである。宮座は他の多くの地域にも見られるので、今後はそれらの事例を多く検討することによって本稿の論旨にさらに検討を加えていこうと思う。

1 頭屋祭祀再考

頭屋もしくは当屋と呼ばれる人によって営まれる祭の形態は日本各地にみられるが、西日本に主にみられる宮座慣行は、その頭屋祭祀の典型的な例としてたびたび取り上げられてきた。宮座は肥後和男の『宮座の研究』¹⁾によって最初に体系的に研究された。肥後によれば、宮座慣行がもっとも多く行われているのが奈良県であり、つぎに京都府、大阪府、滋賀県そして兵庫県、三重県、和歌山県に分布するとしている²⁾。

本稿では宮座に関する長く、数多くの論議にいちいち立ち入って宮座に関する論議を展開するつもりはない³⁾。しかし頭屋祭祀を考察する中で宮座の論議を避けてとおることはできない。ここでは頭屋祭祀としての宮座という観点から数多くの宮座論議の一端を振りかえるとともに主に事例研究を中心におこなおうと思う。

宮座慣行には派手な祭はほとんどない。「宮座は村落内において一定の資格を有する男子が一座して神仏をまつる組織⁴⁾」といわれるがではその具体的な祭祀の事例はどのようなものであろうか。いくつかの文献資料にもとづいて宮座慣行がどのようなものかをみてみたいが、その前に宮座とは何かという点について先の肥後和男の『宮座の研究』の中で⁵⁾中山太郎、中川政治の定義を引用す

* 本学教授 文化人類学

る形で宮座を定義している。この精細については述べないが、そのいくつかを指摘してみたい。

その定義によれば、“宮座はまず神社を中心とした組織”であり、“宮座に属する家筋では交代に神社の祭儀を司り、その期間中は神主となり、併せて神社維持の任務に当たること。ただし多くは一年交代である。“そして”新たに宮座に加入せんものに対しては、宮座の定規により、神社あるいは宮座中に冥加金を納めさせて許す土地とこれに反して絶対に許さぬ土地とがある。”

肥後は中川にしたがって全体で12の宮座定義の指標を示しているが、ここでは本稿の展開に必要なものをここにいくつか提示するにとどめる⁶⁾。したがって座と村落組織の問題や村落共同体の経済(田畑)にまつわる村座、株座の問題にはふれない⁷⁾。本稿は交代で神社の祭儀を司り、その期間中は神主となる、という肥後の指摘を頭屋祭祀という枠組みで考察しようとするところにある。以下において宮座慣行をとおした頭屋祭祀の事例を獅子舞による御頭神事を中心としていくつか検討してみたい。

2 三重県の頭屋祭祀⁸⁾

① 三重県美杉村下之川の仲山神社のヘノコ祭(ごんぼ祭)

2月11日(旧暦では正月11日)に行われる。頭屋は午後3時頃から自宅で50人以上のお客を接待する。接待には蒸したり煮たりした15キロから16キロのゴボウを赤味噌と唐辛子で味付けをしたものが用いられ、朴の葉に盛りつけられる。この料理は神への供えものであるとともに頭屋の家が集まった部落の人々の酒の肴になる。頭屋の家には杭が打たれそこにのぼりが立てられているため他の家と区別がつけられる。頭屋の座敷の床の間にはヘノコサマ(男根のシンボル)とシメ(女性のシンボル)が飾られており、シメは藁でできていて毎年新たに作り直される。これらは2月12日の頭渡しのときに次頭(つぎの年の頭役)に引き渡される。頭渡しのときには今年の頭屋の家から部落の人々が行列を整えてヘノコサマと宮座の席で用いられる膳碗などが納められている長持ちを次頭に渡すのである。

これとは別に仲山神社では神前で若者たちが方形的的を射る歩射(藁目神事)とボラを調理する真魚箸(まなばし)神事が行われる。これらは仲山神社の神職によって行われる行事である。仲山神社の神職は頭屋が行う宮座儀礼には関わっていない。この点は柳田が述べたように神社の祭祀と村落共同体の祭祀とのあいだに必ずしも強い関係があるというわけではない。またこの資料でみる限り、宮座の成員がどのように構成されているのかは明かではないがそれぞれの字が4、5組に分かれていて組単位で頭屋を引き受ける。

① 三重県御園村高向(たかぶく)の御頭神事

高向には一つの伝説がある。それによると高向大社の内宮の宇須野社に大杉の神木があり、あるときこの巨杉の精が木昌と名付けられた男子を生む。村に悪疫が流行ったとき獅子頭をかぶって舞い、悪疫を祓ったという。この子は正法寺の住職に育てられたのだが、この寺は今では廃寺になり、その跡地に建てられたという公民館(会所と呼ばれる)の神庫に獅子頭は安置され、神として崇められる。この獅子舞の舞い手は杉太夫と呼ばれる。杉太夫の家筋は決まっているという。獅子頭は村人からオカシラと尊称され、雄、雌の二体がある。

祭日は2月15日に行われ、昼の祭と夜の祭がある。昼の祭では結衆（後述）の立ち会いのもと封印がしてある御頭を会所からだし、そのまま結衆に守られて高向大社へ導かれ。社前には右に結衆、左に頭屋6人がならび、そこで結衆が封印を切って御頭にヌサをつけ宮司の型どおりの祝詞で神社前の祭礼が終わる。これが終わると、杉太夫等のヒヨリミの儀式がある⁹⁾。これは一種の日の吉凶の占いあるいは呪術に関係するものと思われる¹⁰⁾。これが終わるとスサノオがヤワタの大蛇を退治することを表しているとされる七起こしという舞が神社で舞われる。この七起こしはコウドノサンの前でも舞われる。コウドノサンは大社の西にあり、自然石が一つおかれているだけで祠などはない。この後部落の各家を雄雌2頭の獅子頭が別々に回る。各戸の当主はククメモノとして鏡餅を差し出す。

この2つの獅子頭が門笛とともに丁重に出迎えられて頭屋の家に入ると杉太夫や楽隊の人々は、頭屋の座敷で酒宴がはじまる。この間近所の人々は頭屋の家にククメモノにくる。頭屋の家で行われる儀礼で重要なものがオカシラアゲである。これは若者が、かなり重い御頭を両手で頭上に差し上げて振り回す。壮年者もこれを試みるがほとんどは若者達である。この儀礼は頭屋の座敷の宴会のなかで行われ、宴も終わりになった頃、先の七起こしが頭屋の宴席で舞われ、口取りの行法のあと夕暮れ頃に昼の神事が終わる。

これに対して夜の祭は打ち祭と呼ばれ、火祭である。この祭の中心となるのが共盛団の若者達である。“追い込み”という会所前の籠り場（藁や竹、板で囲ってある）に一杯気分の若者達が集まり、大騒ぎをする。他方、会所の100メートルぐらい東にはブンロと呼ばれる場所があり、若者達がかかり火を焚いて雄雌の御頭を守っている。会所前の若者達は追い込みの囲いを蹴破り、ブンロに飛び込んで雄雌の御頭を頭の上に持ち上げて大見得を切る。その後はだれが挙げてもよく、御頭挙げで大変な騒ぎとなる。そして細い小道はオタイ（3メートルぐらいの大たいまつ）の火が散乱し火の海のようになる。雄の御頭は16才、雌の御頭は13才が真っ先にオカシラアゲをすることになっている。

会所の西側には正月の松や竹などが山積みになったツムギというものがあり、ここにオカシラアゲの団が近づくと点火され、その周りを御頭がまわる。その後村の東のはずれで切り払いの儀礼、シメ切りがあり、これが終わると、御頭はツムギの所に戻ってくる。祭はお方踊りなどの芸能の後、夜12時ごろに終わる。翌日、新頭（つぎの年の頭屋）は二見浦で最初の禊ぎをし、旧頭は無事つとめが終わったことを氏神に報告し伊勢参りもして感謝の意を表す。

以上が祭の概要であるが、ここでこの祭の頭屋について少々整理する必要があるだろう。頭屋が御頭神事とどのように関わっているかを見る必要があるからだ。現在、高向では頭屋は村人すべてがなれるが、かつては結衆仲間といわれる旧家だけがこれを独占していたといわれる。高向大社は選挙によって選ばれた4名の氏子総代によって大社の祭典が営まれているが、御頭神事だけは古来の頭屋制で行われる。頭屋は6軒づつ一年毎の交代制でつとめる。頭屋を受けるということは今でも家の当主にとっては名誉なことである。頭屋は身を清める潔斎を行わなければならない。これは一度ではない¹¹⁾。潔斎は近くの見浦で行われるが同時にこの潮水で家の中を清める。

頭屋は3年間、本頭、前頭、次頭という役につく。そして頭屋の家の玄関入口の軒下に氏神の分

霊であるオハケをたてる¹²⁾。オハケの横には夜の打ち祭りに使われるオタイという長さ3メートルほどのたいまつが立てられる。祭のときにはオタイがいっせいに燃やされ御頭を導く役割をする。オハケをたてるのは高向大社の神職の秘事となっているが、かつては結衆の長老が行っていたらしい。オハケをたてた頭屋は結集仲間と他の頭屋5人を昼間に招いて祝宴を行うがこのときの献立はきちんと決められている。

高向には年齢階梯の組織があり、それが共盛団という若者組である¹³⁾。共盛団はすべての若者が加入する。そして41才で団を抜け中老組に入るが年寄仲間には頭屋を経験人たちが加入することになっており、この頭屋経験者の年寄りたちがかつて結衆と呼ばれる人々であった。また頭屋は村のどの男子でもなれるわけではなく、家の嫡子だけであり、次男以下はなれなかった。高向では6, 7才から11, 12才までに獅子のあやし役といえる口取り役をするがこれも家の嫡子だけしかなれなかった。少年時代に口取り役をしたものは、21才で将来の頭屋となるため頭屋仲間に入る。

③ 三重県玉城町宮古の御頭神事

宮古では頭屋をネギといい、地域が上区と下区の2つに別れている¹⁴⁾。御頭神事はこの上区と下区の境のクスギ(かつては楠の巨木が立っていたといわれ、また社日さんという五角形の石柱も立っていたという)で行われる。ここの御頭神事はこの地区の鎮守(ウブシナサン)とは無関係に行われる祭である。ここの御頭神事は高向とはいろいろな面で異なっている。それは、占いないし呪術的な儀礼の側面が強くみられるからである。それがクスギで行われるギッチョバイとモモクリアイというカギ引き儀礼である¹⁵⁾。これは竹製の2段の棚の上段に男性と女性を表す赤松と黒松から作られたギッチョ(径10センチ、長さ35センチぐらい)をのせ、下段には桃と栗の木から作られた又木(これがカギである)が12個置かれている。この棚からネギがギッチョを転がす。するとこれを子供達が奪い合う。つまりギッチョバイとは“吉兆を獲得する呪術である”¹⁶⁾。モモクリアイは桃と栗の又木を絡み合わせる儀礼で若者達が行う。この二つが同時にクスギで行われる。モモクリアイには男女陰陽の観念があり、豊饒祈願の儀礼と考えられるがこの儀礼は、呪術的要素というよりト占つまり神の神意を押し量るという意味が強いように思える。

御頭神事における上区と下区の関係は確かに興味深いものがあるが、これを双分組織とするためには彼らの居住空間や親族組織に現れる双分組織などと比較しなければならない。したがってここでは双分組織という観点からではなく、儀礼における上区と下区関係をみておきたい。

この祭は旧暦正月の10日に行われる。ここの御頭は高向とは違って雄だけである。かつては雄、雌2頭のお頭があったといわれるが雌のお頭が盗まれたために雄だけになったという。祭は、まず下区のネギの主導で下区の寺での七起こしの舞から始まる。ついでクスギでこの舞が舞われたあと先に述べたギッチョバイとモモクリアイがここで行われその後上区のネギに司祭権が引き渡される。上区では上区のネギの主導で上区の寺での七起こしが舞われ、つぎにクスギでやはり七起こしが舞われたあと再び下区のネギに司祭権が引き渡される。そして下区のはずれの森で七起こしが舞われ最後に村境で切り祓いの儀式が行われて御頭神事は終わる。一方、祭日10日の夜には上区のネギによって、上区の寺の前の広場でツムギを燃やす打ち祭があり、これは下区にはない。しかし宮古の御頭神事は、高向とは違って“昼の祭と夜の打ち祭の間の境がはっきりしていない”のであ

る¹⁷⁾。

ここから考えられる上区と下区の関係はある種のヒエラルキーがあるという点である。“下区の力が強いことを物語っている”のである¹⁸⁾。この上区と下区のいわば社会的権威の違いはどちらが古くからの地区であるか、という点に関わっているように見える。つまり居住地域として古い下区が、御頭神事においても優越性を持っているのである。したがってまず下区で御頭の七起こしの舞が始まる。御頭神事でもっとも中心的なト占であるギッチョバイは下区のネギの主導で行われている。上区で七起こしが舞われるのは2箇所ではない。その後の区の境や村境での儀礼はすべて下区のネギがつとめている。確かに下区→上区→下区と七起こしの舞は循環しているが、その主要な儀礼は下区に集中しているとのことであり、この限りからいっても下区と上区という区分には双分的観念があるとは考えられない。

宮古のネギ(頭屋)は、上区と下区に一人ずつおり高向の頭屋とは異なって“体が動くうちは一生勤める定め”¹⁹⁾になっている。ネギは、誰でもなれるというわけではなく上区、下区とも特定の家筋の中から選ばれた。もちろんネギは神職の訓練を受けた職業神官ではない。宮古の御頭神事はこのネギ2名と当番6名が主催することになっている。この当番は昔は頭屋といわれていたのである。当番は高向の頭屋と同じように宮古の住人が順番に勤めたものと思われる。

この頭屋の潔斎は、高向では二見浦での禊ぎだけなのに比べてなかなか厳しいといえる。ここではネギと当番の8名は、祭の前日に二見浦で禊ぎをしたうえで祭の日の朝、夜明け前から石風呂に入って身を清める。すなわち潔斎が2重に行われるのである。石風呂とはサウナ風呂であり焼けた石に水を掛け蒸気を満たしたなかで8名は禊ぎをするのである。石風呂では深夜12時から夜明けまで火が焚き続けられる。

宮古ではコドノサンが、家の北西の角にあり家の先祖を祭ったものと考えられるがこれも高向とは異なっている。またネギという常頭屋とみなせる司祭²⁰⁾と部落の住人が輪番で当たる当番の2種類の頭屋によって祭が行われるのも高向とは異なっている。これについて堀田は“ネギは高向の結衆に当たるものか。頭屋はむしろ舗設役の色彩が強い”²¹⁾と述べている。ここで注意すべきことは常頭屋が存在する宮古では高向に比べて潔斎が厳しく求められるという点である。言い換えれば、恒常的な司祭の存在する部落と輪番によってたえず司祭が代わる部落では潔斎に対する態度が異なるのではないかということである。

④ 度会町棚橋の御頭神事

棚橋の御頭は、雄で雌の御頭は宮川対岸の久具という地域にある。したがってこの御頭神事は雄雌一対で舞われるのではなく雄の御頭だけで舞われる。フルドウサンという室町末期の御頭があり、ネギヤの座敷に安置されるが、舞にはこの御頭は用いず神の依り代として扱われる。ククメモノにやってきた村人たちはこのフルドウサンを拜んでいく。いわばオハケの代用と見なすことができる。

棚橋は6組に分かれ、各組からでた六人の頭人によって祭が主催される。御頭神事の祭の権限はすべてこの六人が持っており、部落のほかの世話役などはまったく口をだせないことになっている。六人のうちの一人がネギとなる。ネギの家がネギヤであるが、ネギはネギヤ以外ではいつも笹

竹を手を持っており、これで祓いと清めを行う²²⁾。祭日は旧正月12日である。ここの御頭神事を中心は座敷舞である。村の鎮守は、内城田神社でありウブスナサンは八王子子であるがこの境内では御頭の舞はない。そのかわりイモトリ儀礼がある。

ここの御頭の舞手はすべて十九ど（じゅうくど）といわれる19才になった男子の若者である。棚橋ではこの祭の舞手を勤めることで一人前とされる。十九どが何人いても全員が舞わなければならない。祭日の昼、ネギヤが十九どを招いてもてなしたあと、ネギヤの座敷がマイドとなる。この舞は七起こしではない。つまりヤマタノオロチを象徴する踊りではない。同じことを三回、五回繰り返す踊り（三つ舞、五つ舞）である。この十九どによる座敷舞は夕方五時ごろに終わり、ネギが中心となって行う夜の打ち祭にうつる。

棚橋の打ち祭は、夜の8時ごろに始まるがタイマツの火をたかない。高向のような派手な火祭ではない。しかも打ち祭では獅子頭よりもわき役のシシアヤンなどが活躍するのである。天狗面をつけたシシアヤンがそこらじゅうを駆け回って“追いつ追われつあれまわるのだ”²³⁾。シシアヤンは興奮状態で子供たちに挑発されると子供たちも追い回す。“一年に一度の暴れ放題”²⁴⁾なのである。この打ち祭は一旦始まるとたとえどしゃぶりの雨が降ろうと中止することはない。これは、中断なく連続して行わなければならない儀礼ということである。儀礼の中断は儀礼が生み出すさまざまな効果をすべて無に帰す可能性があるだろう²⁵⁾。

ネギヤの前庭で行われていた夜の打ち祭が、夜の11時ごろに終わると獅子頭とネギは内城田神社に行き、イモトリ儀礼を行う。これは里芋の形をした呪物をネギがころがして子供たちがそれを奪い合うという儀礼である。宮古でのギッチョバイにあたる。この儀礼は3回くり返される。そのあとイモがネギに渡されるとネギは、イモ捨てを行う。イモを捨てる場所は棚橋と隣の部落の境の藪の中である。夜の12時ごろ、この儀礼ですべての御頭神事が終わるのである。

ここでも部落の境と御頭神事の関連がみられるとともに舞が、ヤワタノオロチの神話に基づいた七起こしではない、という点を再度強調しておきたい。

⑤ 度会町一之瀬字南中村の獅子神楽

同じ度会町にありながら、ここでの神事は御頭神事ではなく獅子神楽である。祭日は旧正月14日、15日であったが、今日では2月12日である。この神事を主催する頭屋は常頭屋であり、きまつた家筋の出身者が勤めた。その家筋は4家ありかつて結衆を構成していたと思われる。結衆仲間の主たる一軒が神事の頭屋を勤めるが、もしこの家が物忌みになると代わって他の家が勤める。これらの家は大庄屋として記録に載っている²⁶⁾。一之瀬は4つの字で地域が構成されているがその内の2つの地域では頭屋制は廃れており、神事の場所も公民館である。柳田がいうように祭の重要な指標である祭場が、既に失われているといえる。ウブスナ神は八王子子である。

一之瀬川で禊ぎをする頭屋の結齋は、かつてはたいへん厳しかったが今では形骸化している。したがってここも常頭屋が存在する地域であり、かつて頭屋に対する厳しい潔斎があったことをうかがわせる。

獅子頭の舞は頭屋の庭先で舞われる。舞場には一面にワラが敷かれその一部が囲まれていて（ガクヤという）そこに御頭が安置されている。長い髭などを持ったここの御頭は他の地域の御頭と比

べると異質であるという。天狗面をかぶった二人のクチトリがいて獅子とは別個に舞うというのも他とは変わっている点である。クチトリは太刀を持ってお祓い舞をする。クチトリの舞をホック舞といいこれが最初に行われたあと、キリ舞という獅子舞が行われ、つぎにミコ舞が舞われて獅子神楽が終わる。ここには夜の打ち祭はない。舞のあとで座という直会がある。

3 宮座の歴史的成立とその儀礼的特徴

ここまで三重県内の頭屋祭祀の概要を堀田吉雄の著作をとおして記述してきた。しかし今まで、宮座成立の歴史的経緯の問題は、政治制度史との関連や経済史、農村史などと深く関連する問題でありそれ自体大きな問題をはらんでいるが、本稿ではこの問題に立ち入って論議するつもりはないことをすでに述べた。この問題に関してはすでに高牧実の研究が公表されている。しかし頭屋祭祀を検討するうえで、宮座の成立については若干触れなければならない。

高牧実は、宮座の成立についてつぎのように述べる。“宮座をいつの時代のものとするか、歴史学の立場には、大別すれば、中世説、近世説、中世・近世説の3つの考え方があり、いずれも平安末期から宮座がみられるようになると理解し、近代・現代にみえるのはその遺制であるとする。しかし早い時期の宮座としてあげられている事例は、祭祀頭役制にかかわるものと考えられ、宮座とみるかどうか再検討を要すると思われる。²⁷⁾”そして7つの宮座についての見方を提示している。それによれば“平安時代以来の仏神事祭礼の頭役の制度が、荘園公領の支配・経営のなかで、頭役を名・郷に負わせる形で採り入れられ、…惣荘・惣村の発展と結びついて、そこに宮座が成立してきた。…宮座の成立の時期は、惣荘・惣村の成立時期の早い畿内とその周辺では、13世紀以降…西日本では15世紀以降…東日本では16世紀以降…と考えられる。宮座は、惣荘・惣村とか村というような地縁的で自治的な村落共同体や、用水、入会林野などを共同用益する惣村の連合や村々の連合の村落共同体と結びついて成立してきた。…その構成員は…本百姓の名かでも草分百姓など家格の高い上層の家筋だけに限られる場合も多く、したがって身分的な特権的な閉鎖的なものであった。²⁸⁾”

高牧の宮座成立過程の主張は、近世の宮座は中世の宮座の残存にすぎないとみる肥後と宮座は近世に成立したものだとする竹田の見方をうまく折衷しているように思える。宮座は、高牧がいうように近世に至って新しい秩序のもとに再編成されたのであるが、はたして、高牧のいうように江戸中期の宮座の変容と後期幕末にかけての変容が同じ性質のものであろうか。高牧はこれを“身分的・特権的な秩序の動揺・打破の動き”と一括しているがはたしてこのように一括できるのかはなはだ疑問である²⁹⁾。中世的な公事屋株と部屋株が江戸時代天明期にどのように変容していったかをみると、その社会的な要因が江戸後期・幕末と一緒にできるとは思えないのである³⁰⁾。さらに本稿と関係するところでもっとも注目しなければならない点は祭祀頭屋制に関する記述である。高牧は“当初、頭屋は頭役を勤仕する頭人の斎忌の場であり、頭役勤仕の準備の場、奉祭の場であったと思われる。³¹⁾”とするが、祭祀頭屋制においてもっとも重要だと思える頭廻りに関してそれがいつどのようにして始まったのかという点をはなはだ曖昧なままなのである³²⁾。頭廻りの問題は歴史的観点から理解されているとは思えない。また頭廻りを例えば宮座の付属物のような観点からみ

ても理解されるとは思えないのである。頭廻りを理解するためには、マルセル・モースのいうように頭廻りそのものの社会的機能と性質をつまみ頭廻りというものの構造的意味を明らかにしなければならないのであり、この観点が今後予定される一連の頭屋研究の出発点でもあるのだ。

この観点から柳田国男のつぎのような指摘は非常に重要なものと思える。“祭場には別に定点せられたお旅所においてでなく、頭屋と称する常民の家を持って充てる例は、これも列挙がしにくいほど方々にあります。³³⁾”頭屋は神宿になり、そこはあるところから移ってきた神のお旅所となる。そしてこのお旅所は毎年、移動する。そしてその移動につれて神も毎年お旅所を変え移動する。“東京の市中にも残っている頭屋はこの系統のもので”³⁴⁾この点で祭祀頭屋制が宮座に限ったものではないのは自明である。さらに柳田はお旅所に関して”その道筋には定まって一箇所以上、神輿がしばらくの間休止したまうか、少なくともその前で大いに揉み立てられる家があります。…これが臨時のお仮宿になっているのであります。東京ではこれを年番とか頭番の家とか、いうように思いますが確かではありません。³⁵⁾”と指摘している。祭祀頭屋制が日本のいたるところでみられるということを柳田は強調しているのであり、日本社会の一つの特質を表す社会的象徴と考えられるのである。したがって祭祀頭屋制を歴史的に研究してもその性質と機能を明らかにすることはできないだろう。

先にあげた宮座の資料から宮座の頭屋祭祀の特徴を整理してみたい。まず美杉村のへノコ祭では神の依り代とみなせるへノコとシメが順繰りに頭屋に引き継がれる。そして今年の頭屋がつぎの年の頭屋にこれを引き渡すときは必ず行列が組まれるのである³⁶⁾。これは神が移動することなのである。神の移動が年番頭屋の交代の時の儀礼に象徴されるのは、日本のほとんどの祭礼、および祭では頻繁にみられる例ではないだろうか。

ウブスナは仲山神社であるが、へノコ祭はこの神社とは直接かかわってはいない。この祭を主催するのはあくまでも頭屋だからである。頭屋はある一軒の主人が勤めるが、ここ下之川では字の何軒かが組を作りこの組がいわば全体として頭屋を引き受けるようなところがある。したがって祭の料理などは組全体で作る。このように一軒の家が頭屋としてすべて負担を負うというのではなく組という集団が全体として頭屋の役割を果たすという点が下之川の特徴といえるだろう。

つぎに高向では夜の打ち祭が派手で目につく儀礼であるが、祭の中心は獅子舞にある。獅子舞に使われる獅子の御頭が神の依り代とされこれをかぶって舞う杉太夫は決められた家筋のものでなければならない。神と接触するものは、誰でもいいというのではなく頭屋と同じく二見浦での潔斎が義務づけられている。しかもこの杉太夫はヒヨリミを行う。宮田登によれば長者の家筋がこのヒヨリミを行いその年の穀物の吉凶を占ったという。宮田によれば頭人という祭祀の司祭者の特色とは時間の管理にあるという。日本における王権（天皇制）とは時間を管理することから生み出されたとするのである³⁷⁾。

頭屋はここでも1年毎の交代で順番に勤めることになっており、頭屋の役を受けるというのは名誉なこととされている。高向では頭屋の役を受けるとその徴であるオハケを玄関に立てるが、これは神の仮宿、ないしお旅所のしるしとみなしてもよい。獅子頭は頭屋に恭しく迎えられられると村人達は、神がいるお旅所つまり頭屋の家にクメモノを持ってくるのである。

頭屋祭祀研究(1)

またここでは共盛団と呼ばれる若者組があり、これが御頭神事で重要な役割をはたしている。それがオカシラアゲという儀礼である。頭屋での舞のあと宴がはられ、そこに安置されている獅子頭を若者達が競って持ち上げるのである。これはお神輿を担ぐ若者達を連想せざるを得ない。つまりこの獅子頭は神輿と同じ扱いを受けるのである。神輿とはお旅所であり、神輿を担ぐというのはお旅所ごと担ぎ挙げるということである。

高向には年齢階梯的な組織があり、共盛団、中老組、結衆と年齢によって所属する組が変わる。この中で結衆はかつてはあるいくつかの家が結衆仲間を作り独占していたといわれるが、これをみる限り、高向には祭祀長老制と呼べるものがかつてあったといえるかもしれない。しかし結衆を年齢階梯と結び付けるよりも宮田のいうように長者の機能という点から結衆をみる必要があるだろう。それは日本の王権の機能と性質を明らかにする糸口となりうるかもしれない。

つぎに宮古の御頭神事では屋敷神の問題(コドノサン)がでてきたが、この点についてはつぎの機会に述べてみたい。ここでは宮田が指摘したような占う人としての頭屋の機能が強くでている。しかもこの頭屋は、輪番制ではなくネギといって常頭屋であり、いわば一生頭屋を勤めるのである。ネギを受ける家筋も決まっている。誰でもなれるというわけではない。

宮古の御頭神事はウブスナの神事ではない。祭の中心と思われるものはクスギで行われるギッチョバイとモモクリアイである。当然七起こしの獅子舞も舞われるが、むしろ吉兆を占う儀礼がより強調されている。またギッチョバイは男性と女性のシンボルであり、モモクリアイとともに豊饒を獲得するための儀礼でもある。この豊饒儀礼を司るのがこのネギなのである。ネギはいわば司祭である。このネギは高向の頭屋のように自らの家をお旅所として差し出すことはない。これは上区と下区に分かれ御頭がこの2つの地区を循環するのが祭の重要な要素であり、神が一カ所にとどまることがないからである。この下区、上区の区分を双分組織として考えることは、非常に難しいということはすでに述べたとおりである。

この御頭は雄だけで、雌の御頭は盗まれたことになっている。したがって御頭神事では雌がかけた状態で獅子舞が演じられるのに対して、豊饒儀礼である男女のシンボルを用いたギッチョバイが行われるのである。この異質さはやはりネギと当番の関係をより詳しく検討しなければ明らかにされないのではないだろうか。

棚橋の御頭神事も宮古のそれと同じようにト占を中心とする祭であるといえる。棚橋の頭屋は宮古とは異なり、頭屋は輪番制である。その中の一人がネギになるが、このネギは祓いや清めを行うための笹竹を持っており、司祭の機能が強調されているといえる。ネギは自分のいえ(ネギヤ)にフルドウサンという古い獅子頭を招き入れるので、ネギヤがお旅所になる。したがって宮古と違って神は循環するのではなく、その年、移動するのである。

ト占の儀礼がイモトリ儀礼である。このイモトリ儀礼は宮古のギッチョバイと同じものといえるが、違いもはっきりしている。それは里芋の形をした呪物を転がすして子供達がそれを奪い合う、という儀礼を3回繰り返した後で、その呪物がネギに戻され棚橋ととなりの部落の境に捨てられるのだ。境に捨てるということは、呪物を自分の領域から排除する、ということになる。イモトリ儀礼は排除の儀礼であり、この意味で供儀的な構造を持つ儀礼のように思えるが、さらに検討しなけ

ればならないだろう。

他方、一之瀬の獅子舞は上の4つの例とはことなり、御頭神事ではなく獅子神楽であった。この神事を主催する頭屋は輪番制ではなく、決まった家筋の常頭屋である。常頭屋がある地域では一般に祭の時の潔斎が厳しくなる可能性がある。ここもかつてはそうだったようだ。

この頭屋はやはりお旅所としての性格を示している。頭屋の庭先に舞場が作られ、その一角がガクヤとして仕切られ、そこに獅子頭が安置されるからだ。そして最初に舞うクチトリの舞は、祓いの舞、すなわち排除の舞である。その後の獅子舞もおそらく悪霊を祓うことを目的とした排除の舞であろう。

以上、三重県内の五つの御頭神事をみてきたが、本稿で問題としたのは頭屋の在り方と御頭に象徴される神の在り方であった。そこには明らかに司祭と神が年ごとに移動するものであるという特徴を指摘できる。すなわち日本の司祭（頭屋）と神は毎年移動する存在なのだ。このことは司祭の機能が、ある特定の個人に集中することなく共同体のすべての成員に万遍なく分散するという意味を同時に共同体を統括する強力な権威であるべき司祭の権力が弱いということを示しているように思える。また柳田がいうように神が頭屋の輪番とともに毎年異なったお旅所に招かれるというのは、神がいつも世俗的な共同体の中において、共同体の中を循環するだけではないかとも考えられるのである。つまり神は彼岸からお旅所へ降臨するのではなく、いつもこの世界に存在していて毎年、輪番頭屋とともにお旅所に入るということではないだろうか。

このようないわば移動する司祭、移動する神の問題をより明らかにするためには、お旅所の問題や、神の仮屋の問題、氏子、氏神の問題等今後検討しなければならない課題が残っている。

- 1) 肥後和男『宮座の研究』1941年 弘文堂書房
- 2) 前掲書, p. 78
- 3) 特に宮座が、村の他の組織に比べて排他的な特権的祭祀組織であるか否かという論議には深く立ち入らない。本稿で論議しようとするのは頭屋といわれる存在についてであり、頭屋祭祀の性質に関してであって、この意味で宮座も頭屋祭祀の一環のなかでとらえようとするものである。
- 4) 福田アジオ「宮座の社会的機能」(五来 重ほか編『講座 日本の民族宗教 5』1980年 所収), p. 90
- 5) 前掲書, pp. 35-36。肥後が指摘するように(前掲書, p. 15-p. 20) 中山は、『社会学雑誌』第6号(1924年)に掲載された「宮座の研究」によって“神社の祭祀と座の関係”を初めて中心的テーマに据えたのである。中山は宮座を考察するときに、多くの地誌類、つまり、文献資料だけにたよっていたが、これに対して中川政治は近江地方を現地調査して、中山の定義に沿うかたちで宮座を研究したのである。肥後はこのときの中川の論文、「近畿における宮座の研究と古代村落の社会形態」(『國學院雑誌』第33巻, 8, 9号, 1927年)をほぼ踏襲するかたちで宮座を定義している。(福田アジオ, 前掲論文, p. 70-p. 81参照)
- 6) 肥後は宮座について先の中川の定義を引用してつぎのように指摘している。「宮座が一般の氏子組織と大きな径庭を有することを知るのであるが、その中心は座とよばれる行事にあるのであり、それはいうまでもなく、神を祭る一つの形式に外ならない。…この一座して神を祭ることこそ宮座の発生的意味であり、やかつてそうした行事を行ふ根底として氏子の間に一定の組織を見ることになり、その組織に対してもやはり座という名称を与えたものであることになるのである。かかる組織は集会が一時的性質であるのに対して一つの恒常性をもっている。」前掲書, pp. 36

頭屋祭祀研究(1)

- 7) 村座、株座の歴史経緯についてはさまざまな論者によって展開されてきた。例えば、竹田聴洲『村落同族祭祀の研究』p. 134-p. 148, 1977年, 吉川弘文堂 参照。また福田アジオは、前掲論文の中でこの問題の整理を試み、宮座をつぎのように規定している。
「特定の地域社会の神仏をその地域の住民の中の一定の資格を有する男子が一座してまつる行事およびその組織ということになろう。」(福田アジオ, 前掲論文, p. 77)
- 8) 堀田吉男『頭屋祭祀の研究』, 1987年, p. 333-p. 443, 1987年 光書房
- 9) 舞手の杉太夫矢口取り等が鳥居の所まで駆け出し、「ヒヨリダ, ヒヨリダ」叫ぶのだ。この杉太夫の家筋はきまっており、誰もがなれるというわけではない。(堀田吉雄, 前掲書, p. 346)
- 10) 宮田 登はつぎのように述べている。“宮座が内包する儀礼の中心には、時間の更新に関わる諸要素が発見できるのであり、それに直接携わるのが宮持・座元・頭(当)屋など宮座組織の中心的な家筋であった”(『日和見』1992年 p. 172 平凡社)。ここに書かれている日本王権論はたいへん示唆深いといわざるを得ない。宮田の主張についてはいずれも詳しく検討する必要があるだろう。
- 11) 獅子舞の踊り手である、杉太夫も当然潔斎を行う。
- 12) 柳田国男はつぎのように述べている。“とにかく今日では頭屋がきまっても、すぐにそのしるし軒を立てに来るといふ例はあまり多くない。ただその際にまず家を洗い浄め、注連をはりめぐらし穢を遠ざけようとするだけで、いよいよ祭の日が近づき、潔斎がいちだんと厳重になるに至って、始めてオハケサンという大きな幣や、笹竹や榊の木やまたは幟の竿などを立てるのが普通であるが、いずれにしてもなんらかの目に立つ方式をもって、神を祭るべき支度のまったく調っているということを、表示せずにはいないのである。”(『日本の祭り』, 1942年, p. 276-p. 277。(『柳田国男全集』13, 1990年, ちくま文庫, 所収)
- 13) この点について、高橋統一はつぎのように述べている。“この意味で、「年齢階梯」もまた宮座の構成要素である。年齢階梯はその原理から、当然、究極の権威が最年長者に至るから、長老階梯が支配するかたちとなり、いわば長老制となる。——序章でしてきた如く、私はこの点を重視して“祭祀長老制”と規定したわけである。
- 以上の如く4つの基本的要素のうちで、株と年齢階梯が共に宮座の構成要素と考えられ、構造システムを形成するのに対して、他の2つは主に演出システムを形成する機能的要素である。”(『宮座の構造と変化』, 1978年, p. 254)
- これは年齢階梯制が宮座慣行に不可欠の要素であって、これを基礎にして長老の采配が宮座慣行を決定づけているとする考え方であるが、他方、福田は年齢階梯に基づいた祭祀長老制という考え方とは一線を画す見解を表している。
- “その組織化の基準は、家や家の村落内での地位ではなく。村落構成員としての世帯主もしくはその後継者の年齢におかれる。それは、年齢の上限・下限が決まっていくつかの年齢集団を順次登っていく年齢階梯制とは限らない。下丹生の諸頭の加入・脱退にみられるようにむしろ年序制とでもいふべきものであろう。”(福田アジオ, 前掲書, p. 90)
- 福田は“一定の役割を与える年序制は、年月の経過によってかく組織の成員やその内部秩序を変化させていく。すなわち世代を交代させていくものである。”(福田アジオ, 前掲書, p. 90)として年齢集団よりも個人間の年齢順位を重視する。この意味で、ロウ次制(“座に入った時からの年数で席次を決める習慣”, 福田, 前掲書, p. 96)も宮座が、個人の年齢順という個人的要素が重視される性格の一端と見なしている。
- 14) 高橋は、“座の組織が東西・左右・前後というように何らかの双分的形式をとるものがみられる”(前掲書, p. 27)と指摘して宮座の双分的組織が、世界観と深く結びつく人類学上の双分組織の問題と関連づけようとしているようにみられるが、確かに日本文化を考える上で一つの視点となりうるかもしれない。しかし高橋は“実際にはないものが少なくない”(前掲書, p. 254)としつつ相互の役割分担が認められるとし、そこには“2次交代原理”が存在すると考えている。
- 15) 年頭に行われる儀礼で、綱をつけた鈎形のものを神木に掛けて、その綱を引きながら唱えごとをする。この儀礼には2つの見方があり、一つは鈎形のものを神木に投げかけて引っかかるかどうかで神意を占うとい

うものと、もう一つは神木に引っかかった鉤形の木をこちらに引き寄せることで、神をこちらの世界へ呼び寄せるというものである。

- 16) 堀田吉雄, 前掲書, p. 352
- 17) 堀田吉雄, 前掲書, p. 353
- 18) 堀田吉雄, 前掲書, p. 350
- 19) 堀田吉雄, 前掲書, p. 349
- 20) “たくさんの神仏の司祭者だ。”(堀田吉雄, 前掲書, p. 349)
- 21) 堀田吉雄, 前掲書, p. 353
- 22) 頭屋が輪番なのかどうかは堀田の資料を見る限り定かではないが, おそらく輪番で頭屋を受けるであろうと思われる。またこの棚橋にもかつて石風呂があったというがはやくに消滅したらしい。堀田の記述をみるかぎり棚橋の頭屋の潔斎に関しては明確ではない。
- 23) 堀田吉雄, 前掲書, p. 356
- 24) 堀田吉雄, 前掲書, p. 356
- 25) マルセル・モースは『供儀』のなかでつぎのように指摘している。“供儀は始まった瞬間から終わりまで中断することなく, 儀式の順序にしたがって続けられなければならない。”(マルセル・モース『供儀』小関藤一郎訳, 1983年, 法政大学出版局, p. 34。)すなわち儀礼の効果はこの儀式を中断することなく連続して行うことで保障されるのである。もちろんこれは供儀に限ったことではない。
- 26) 堀田吉雄, 前掲書, p. 370
- 27) 高牧 實『宮座と村落の史的研究』1986年, 吉川弘文堂, p. 54
- 28) 高牧 實, 前掲書, p. 60-61
- 29) 高牧 實, 前掲書, p. 61
- 30) 鳥越憲三郎『近世宮座の成立』, 1978年, 弘文堂
- 31) 高牧 實, 前掲書, p. 97
- 32) 高牧 實, 前掲書, p. 89
- 33) 柳田国男「神道と民俗学」(『柳田国男全集』13, 1990年, ちくま文庫所収), p. 476。傍点は筆者。
- 34) 柳田国男「日本の祭」(前掲書), p. 274
- 35) 柳田国男「神道と民俗学」(前掲書), p. 474
- 36) 柳田国男「日本の祭」(前掲書), p. 325。柳田は, 式と行列が最初から関係があったものに違いない, として祭礼における行列を神のお降りと関連づけて考えようとしている。
- 37) 宮田 登『日和日』1992年, 平凡社, p. 186-187。宮田はつぎのように述べている。“この場合もジシガとされる宮座の担い手である家筋が, 穀霊つなぎすなわち穀霊の再生による時間の更新に関わっていることが推察されるのである。(同書, p. 171)”